子どもの未来を明るく照らす支援を実現

ひらたに
平谷こども発達クリニック（福井県福井市）

①発達障害がある子どもの診察。「学校で忘れ物をしなくなったの？　えらいねー」と平谷こども発達クリニック院長の平谷美智夫さん。看護師の有吉ゆかりさんが隣で記録をとる。　②予防接種の計画カレンダーを示して母親に今後の予定を説明する看護師の宮下茜さん。 ③8カ月～1歳の子どもに小麦や卵の食物アレルギー経口負荷試験を行う看護師の中西康子さん。 ④母親に「子育てで心配なこと」について問いかける看護師の井田啓子さん。 ⑤平谷こども発達クリニックの外観。2001年開院。2005年に2号館、2013年に3号館を増築

平谷こども発達クリニック（福井県福井市）は、小児科・アレルギー科・児童精神科を標榜し、地域の子どもたちの健やかな成長を支えている。中でも、クリニックの利用者の半数を占める発達障害などのある子どもへの治療と療育*は全国屈指だ。その活動と看護師の活躍の一端を紹介する。

*療育：発達障害など障害のある子どもの自己実現をめざした医療・教育・福祉の連携した支援。

4カ月健診に集まった親子への絵本の読み聞かせ。絵本を読む児玉弘子先生（中央奥）と西川悦子先生（後方右）は元保育園園長で母親たちの育児相談にも応じている

「大きくなったね」と声をかけながら4カ月健診の診察をする平谷院長。院長の言葉が母親の安心につながる

首のすわりを確認する中西さん。発達障害に強いクリニックの特徴を出そうと健診では身体面と併せて精神面の発達を見るチェック票を活用

取材当日は15人ほどの赤ちゃんの予防接種が行われた。非常勤の医師・滝口慎一郎さんと非常勤の看護師・片岡紀子さんも大忙し

食物アレルギー経口負荷試験は毎日2～3人、月約40人に実施。来院後にアレルゲンである小麦・卵などの食物を子どもに与え、時間を追って、皮膚症状・消化器症状・呼吸器症状が出ていないかを中西さんが確認する

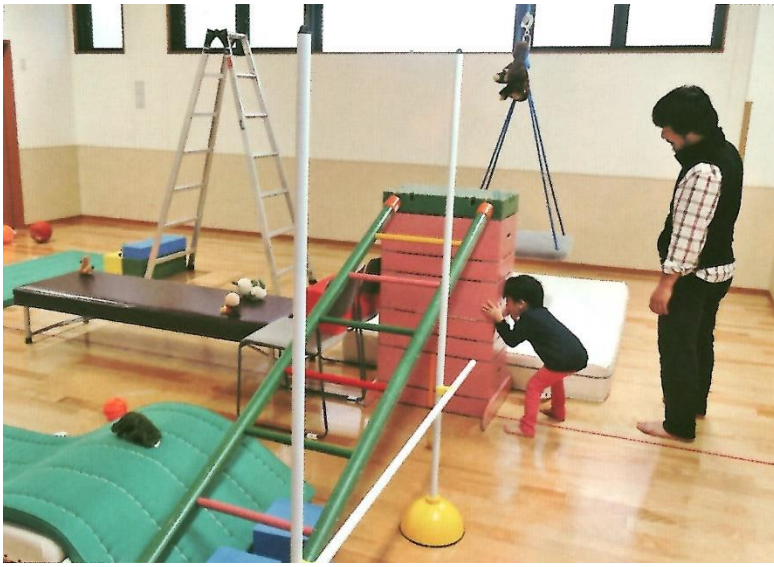
平谷こども発達クリニックの概要

【標榜科】
小児科・アレルギー科・児童精神科
【人員】
院長（常勤医師） 1人
医師　非常勤9人
看護師　常勤4人、非常勤1人
薬剤師　1人
事務・受付　常勤5人、非常勤2人
＜療育スタッフ＞
心理士　常勤5人、非常勤3人
言語聴覚士　常勤9人
作業療法士　常勤1人
【関連施設】
・生活介護・放課後等デイサービス事務所「はぐくみ」・大野市児童デイサービスセンターくれよん教室・言葉の教室
【所在地】
福井県福井市四ツ居2－1409

障害がある子もない子も皆一緒に スクスク育つ！

療育場面紹介：個別指導・児童の小集団指導・保護者グループのあつまりなどがあり、2013年8月に完成した3号館（新療育棟）で主に実施される。
心理士・言語聴覚士・作業療法士が担当

寝返りやハイハイがうまくできない子どもを対象に、遊び方の工夫などを母親に教える親子教室「どんぐり・わにわに発達応援団」
（写真提供：平谷こども発達クリニック）



作業療法士の今井悠人さんは、発達障害がある子どもが日常生活に近い空間で本人が好きな運動をしながらリハビリに取り組めるように、機能訓練室を学校の体育館のようにつくることを提案。天井を高くし、サッカーゴールや卓球台、鉄棒などの用具も整備した
（写真提供：平谷こども発達クリニック）

今井さん。医療と福祉をもとに提供する事業に惹かれ、入職。現在のメインの業務は「はぐくみ」（次ページ参照）での活動

左／言語聴覚士の福田純子さんは、療育の中で発達障害がある子どもが1個、2個などと数えられるか、平面から立体をイメージできるかなどを確認

「看護師からの情報が療育に役立つ」と福田さん

下／大阪大学基礎工学部・石黒研究室（知能ロボット研究室）と福井大学こどものこころ診療部熊崎医師（精神科）との共同研究：ロボットを発達障害の子どものコミュニケーションに活用できるか、試行中。ロボットは、連合大学院（大阪大学・福井大学など5校：小児発達学研究科）の福井校大学院生・新井清義さんがパソコンに打ち込んだ台詞を話す

地域の特別支援学校・小中高等学校特別支援学級に通う障害がある子どもを対象に「はぐくみ」で実施している放課後等デイサービス。取材当日は、指導員の藤部麻弥さん（左）、津田幸華さん（右端）とともにハロウィーンパーティー用のマスクをつくっていた。スポーツやダンスなどもプログラムの1つ。1日の定員は20人で、平日の平均利用者数は約8人

生活介護・放課後等デイサービス事業所「はぐくみ」の概要

【事業内容】
生活介護（平日9時～15時30分）・放課後等デイサービス（平日14時30分～18時、長期休業日9時～16時）・障害児相談支援（計画相談支援）・保育所等支援

【対象】
障害福祉サービス受給者証を持っている人（生活介護18歳以上）

【人員】
管理者・医師・看護師・作業療法士・生活支援員など常勤・非常勤合わせて約12人

【所在地】
福井県福井市四ツ居3－5

事業の願いと意義
障害のある人が地域の中で仲間をつくり、当たり前に充実した人生を送ることを願い、皆が落ち着ける場所の提供や仲間づくりなど、利用者・保護者・地域のニーズに応じて対応している。
（高野幸嗣所長）

放課後等デイサービス事業の一環として月2回行っているフットサル（写真提供：平谷こども発達クリニック）

医療・福祉・教育の連携で障害のある人を支える

生活介護・放課後等デイサービス事業所「はぐくみ」の活動

生活介護で、生活支援員の五十嵐雄二さん（右）と木村さん（奥）の協力の下、アイロンビーズや読書などそれぞれが好きなこと、得意なことに熱中

生活介護で、生活支援員の木村瑞紀さんが見守る中、足湯を楽しむ利用者。「本来なら大学や専門学校に通う年齢であり、同年代の若者と同じような経験ができるよう、遊びや勉強などをバランスよく組み合わせたプログラムの提供を心がけている」と作業療法士の今井さん。 1日の定員は20人で、現在の利用者は9人

「はぐくみ」の外観

「はぐくみ」の前庭に咲き誇るバラ

平谷こども発達クリニック（福井県福井市）は平谷美智夫院長が、小児科医としての卓越したスキルと専門領域とするアレルギー、発達障害の知識・技術を生かし、2001 年 4 月に開院した。2005 年と 2013 年の 2 度にわたり療育棟館を増築し、2014 年 4 月には障害のある人たちを生涯にわたって支えようと、生活介護・放課後等デイサービスを実施する福祉事業所「はぐくみ」を近隣で立ち上げた。

平谷院長には「子どもたちのために必要なサービスがあれば、医療の枠を越えて福祉・教育の分野とつながっていく」との強い思いがある。

平谷こども発達クリニック
平谷美智夫院長

看護師
井田啓子さん

看護師
中西康子さん

左／看護師
有吉ゆかりさん

右／看護師
宮下茜さん

活躍する4人の常勤看護師

クリニックには平谷院長が全幅の信頼を寄せている 4 人の常勤看護師がいる。それぞれが専門性を生かしながら日々の業務に邁進している。

一般小児科のケアに携わる勤続 11 年のベテラン看護師・井田啓子さんは、「母親の不安な気持ちをくんで、治療についてゆっくり時間をかけて説明することを心がけている」という。週 1 日は「はぐくみ」で医療が必要な利用者へのケアを実施しており、「今後は生活介護の利用者の健康管理にもかかわっていければ」と話してくれた。

アレルギーを得意としているのは中西康子さんだ。食物アレルギーがあり対応に困っている母親には、「食べられるものがどれだけあるかを示して、ポジティブな気持ちになれるようかかわっている」という。

有吉ゆかりさんは発達障害のケアに意欲的だ。「発達障害のある子どもは個別性が高い」という観点から、心理士や言語聴覚士、作業療法士から情報を収集し、その子どもに合ったかかわり方を工夫している。

最も若手の看護師・宮下茜さんは「スタッフは皆、患者さんのことをいちばんに考えて対応している。私もそういう姿勢を見習いたい」と目標を語ってくれた。

クリニックを利用する母親からは「看護師が親身になって相談に乗ってくれることが魅力」との声が多く挙がった。

クリニックの周囲に植えられた季節の花がほっとする空間をつくる（写真提供：平谷こども発達クリニック）

多職種連携が強み

心理士、言語聴覚士、作業療法士などさまざまな職種が協働して治療・療育に当たっていることもクリニックの強みの 1 つだ。看護師はそれらの職種と情報を共有し、安心・安全なケアの実現をはかっている。

クリニックのもう 1 つの特徴は職員が全国から集まっていること。お盆やお正月休みのあと、北は東北から南は沖縄まで各地のお土産がスタッフルームに並べられる。福井大学をはじめ東京や金沢からの代診医師、東京・大阪などからの療育スーパーバイザーも含めて多彩な職種・出身地の人との出会いも職員の貴重な財産となる。

＊

臨床研究はエビデンスベースの療育の質向上につながるとの平谷院長の考えで、福井大学医学部などとの共同研究成果を発表している。日本の発達障害の診断・治療・療育の最先端を走り続ける同クリニックの活躍にこれからも注目していきたい。

撮影／坂元 永　文責／阿部 真里子（ライター）